

《論 文》

# 聖書に学ぶビジネス学

## —— マタイによる福音書を中心に① ——

山 下 雅 弘

はじめに

神は「すべて」であり、「共に歩む存在」であると考えます。

本文では、聖書を論理的、現実的に解釈し、ビジネスに関係すると考えられる箇所を一部引用し、その直後に解説しました。他の視点も取り入れます。究極的には神のためになることが幸いです。

現代人は現代の法や憲法に従うべきであり、差別には反対です。聖書の引用には、「新共同訳聖書」を用います。

本稿は、マタイによる福音書1章～12章を中心に扱います。

マタイによる福音書1章 イエス・キリストの系図（ルカ3 23-38）

- 1 アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図。
- 2 アブラハムはイサクをもうけ、イサクはヤコブを、ヤコブはユダとその兄弟たちを、
- 3 ユダはタマルによってペレツとゼラを、ペレツはヘツロンを、ヘツロンはアラムを、
- 4 アラムはアミナダブを、アミナダブはナフションを、ナフションはサルモンを、
- 5 サルモンはラハブによってボアズを、ボアズはルツによってオベトを、

- オベトはエッサイを、  
6 エッサイはダビデ王をもうけた。  
ダビデはウリヤの妻によってソロモンをもうけ、  
7 ソロモンはレハブアムを、レハブアムはアビヤを、アビヤはアサを、  
8 アサはヨシャファトを、ヨシャファトはヨラムを、ヨラムはウジヤを、  
9 ウジヤはヨタムを、ヨタムはアハズを、アハズはヒゼキヤを、  
10 ヒゼキヤはマナセを、マナセはアモスを、アモスはヨシヤを、  
11 ヨシヤは、バビロンへ移住させられたころ、エンコヤとその兄弟たちをもうけた。  
12 バビロンへ移住させられた後、エンコヤはシェルティエルをもうけ、  
シェルティエルはゼルバベルを、  
13 ゼルバベルはアビウドを、アビウドはエリアキムを、エリアキムは  
アゾルを、  
14 アゾルはサドクを、サドクはアキムを、アキムはエリウドを、  
15 エリウドはエレアザルを、エレアザルはマタンを、マタンはヤコブを、  
16 ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼  
ばれるイエスがお生まれになった。  
17 こうして、全部合わせると、アブラハムからダビデまで十四代、ダ  
ビデからバビロンへの移住まで十四代、バビロンへ移されてからキリス  
トまでが十四代である。

ここで書かれていますのはイエス・キリストの系図であり、系図の一  
例です。現在出ている結果は何代にも渡り様々なことをへてようやく出  
ている結果であるとも考えられます。

この系図には、強く意欲的な信仰を示した人たちが含まれています。  
イエスはそのような人々の子孫であるとのこと。

日本にも永く続く家系があります。

## マタイによる福音書1章 イエス・キリストの誕生（ルカ2 1-7）

18 イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。

19 夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにすることを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。

20 このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。

ヨセフが、イエスの実の父親が分からないので、マリアとひそかに縁を切ろうとしたことも正しかったかもしれません。しかし、それではその先ヨセフもマリアもイエスも大変であったかもしれません。

ヨセフは、マリアを迎え入れ共に育てるという方法をとりました。イエスが育つためにはこのヨセフの考えと決心は重要であったと考えます。

他人から非難されてもよく耐えるように教え、希望がないように思われる時に生き方を教える父親がイエスに必要でした。

## マタイによる福音書2章

10 学者たちはその星を見て喜びにあふれた。

11 家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。

貧しい家に生まれた幼子が後に指導者になるとのことです。幼子イエスは学者たちが探し出して拝み贈り物を献げる存在であったとのこと

す。幼子のいる場所を見つけ喜びを感じ、拝み贈り物を献げる価値を認めたということです。どこか考え方がひっくり返っています。学者たちは貧しい家庭に生まれた幼子にひれ伏し、新しさに出会いました。経済格差を縮めることや節約の大切さも分かったかもしれません。

占星術も重要であるかもしれませんが、違う視点も取り入れますとさらなる喜びに繋がると考えます。視野が広がり、学問の進歩に繋がると考えます。自分たちだけが優れているという考えからも救われます。新しさを受け入れようとしたこの人々はさらに立派になったと考えます。

救いは周囲の状況が変わることによってだけでもたらされるのではなく、自分の視座を変えて同じ状況に望むことによってでもたらされることもあると考えます。同じ状況が違って見えることがあります。

若者がいるからわたしたちのビジネスが成立します。多かれ少なかれ同様の事が他のビジネスにおいても言えます。

## マタイによる福音書 2 章 ヘロデ、子供を皆殺しにする

16 さて、ヘロデは占星術の学者たちにだまされたと知って、大いに怒った。そして、人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。

自分を追い越しそうな優れた人が出現しそうになり、権力者が手当たり次第に子供を虐殺する悲劇が起こっています。一人の王座を守るため多くの幼子が犠牲になったとのこと。これではこの地域に誰もいなくなります。クリスマス物語にはこのような一面も報告されています。頂点に立つまでの過程に幸せがあるのかもしれません。

自分が新しくなることによって、王座は譲っていく方が慕われ、未来を築いていくことができます。

### マタイによる福音書 3 章

15 しかし、イエスはお答えになった。「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです。」

イエスは他人から洗礼を受けた人でもあります。自分も素直に新しくなることを実践して教えています。

わたしたちは、様々な事を受け入れ、改めるべき所は改めることが必要な過程になることがあります。一つ一つの過程を順序よく踏むことが大切です。

将来、正しくなることでも今はそのタイミングでない場合もあります。

### マタイによる福音書 4 章 誘惑を受ける（マコ 1 12-13、ルカ 4 1-13）

1 さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、霊に導かれて荒れ野に行かれた。

2 そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。

3 すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。

「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」

4 イエスはお答えになった。

「『人はパンだけで生きるものではない。

神の口から出る一つ一つの言葉で生きる。』

と書いてある。」

イエスが荒れ野で四十日間断食をした後で悪魔の誘惑に対して答えた言葉が『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる。』です。

人が生きていくためには物質的な糧だけでなく精神的な糧が必要です。この言葉は申命記 8 章 3 節からのものです。

#### マタイによる福音書 4 章

5 次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、

6 言った。

「神の子なら、飛び降りたらどうだ。

『神があなたのために天使たちに命じると、  
あなたの足が石にあたることのないように、  
天使たちは手であなたを支える』

と書いてある。」

7 イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われた。

神の子なら神殿の屋根の端から飛び降りても助けてもらえるはずだから試してみろという内容の誘惑をイエスは退けています。そのかわりに、最後まで自分の使命に忠実に生きようと思いました。神の子という意味は自分が救われるという意味とは全く逆でした。

#### マタイによる福音書 4 章

8 更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、

9 「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言った。

10 すると、イエスは言われた。「退け、サタン。

『あなたの神である主を拝み、  
ただ主に仕えよ』

と書いてある。」

11 そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。

利潤などこれを得たらすぐに良くなるという誘惑を退け、ここでは何の利潤も得られませんでした。その時の繁栄ぶりだけを見てはいけないこともあるかもしれません。神の子という意味は自分が大きな利潤を得るという意味とは全く逆でした。

誘惑を退け、あえて早く結果を出さず、祈りや学びのような回り道をすることによって長期的な成長過程が生まれることがあります。すぐに解決を求めるから、あるいはすぐに解決するから問題が残る場合があります。

祈りとは、すぐに結果を出さず、広い視野と長期的展望に立って考えることでもあると考えます。

#### マタイによる福音書 4 章

17 そのときから、イエスは、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って、宣べ伝え始められた。

ビジネス学を変える必要がある場合があると考えます。ビジネス学が悪いわけではありません。しかし、一つの学問を変えていく過程に答えが見つかることはあり得ることです。

#### マタイによる福音書 4 章

19 イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。

漁業は大切ですが、人を引き寄せる人になることで今以上の価値を生むことが可能になると考えます。

さらなる学生数の確保に向け一つの学問をその中において新しくしたことを示さなければならないと考えます。

### マタイによる福音書 4 章

20 二人はすぐに網を捨てて従った。

すぐに行おうとすることがその人がその時にその場で最も重要であると感じていることです。

### マタイによる福音書 4 章

23 イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病氣や患いをいやされた。

研究もできる限り民衆と問題意識を共有して行いますと、成果が上がったとき喜びを分かち合うことができます。それほど大きな成果が上がらなくても大勢の人をいやすことができると考えます。

### マタイによる福音書 5 章 幸い（ルカ 6 20-23）

3 「心の貧しい人々は、幸いである、

天の国はその人たちのものである。

4 悲しむ人々は、幸いである、

その人たちは慰められる。

5 柔和な人々は、幸いである、

その人たちは地を受け継ぐ。

6 義に飢え渴く人々は、幸いである、

その人たちは満たされる。

7 憐れみ深い人々は、幸いである、

その人たちは憐れみを受ける。

8 心の清い人々は、幸いである、

その人たちは神を見る。



9 平和を実現する人々は、幸いである、

その人たちは神の子と呼ばれる。

10 義のために迫害される人々は、幸いである、

天の国はその人たちのものである。

11 わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。

12 喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」

満足していないとき、慢心していないときこそやりがいがあり幸せになっていく可能性があると考えます。心が満たされない立場に置かれてこそ問題意識を持つことができます。神を求めますと、地上に天の国をすることに貢献できるという意味で幸いです。栄えに繋がります。

柔和な人々は後継者になりやすいかもしれません。柔和さという徳を持ちますと、報いは大きく膨らんでいくと考えます。

人は金銭や権力、能力など頼む物を持たずに一人で生まれてきます。常に良い物を吸収し自分を成長させようとしている人は、新しく違った力を発揮できたり救われたりしやすいと考えます。喜びを見出すことができることは才能であると考えます。

これらの句は弱い人が強くなることができる道です。

マタイによる福音書 5 章 地の塩、世の光（マコ 9 50、ルカ 14 34-35）

13 「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。

14 あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができ

ない。

15 また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。

16 そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」

塩は目立ちませんがなくてはならない存在です。人は存在するだけで価値があり、役に立つことができます。目立たなくても自分の得意なことを探し磨き役立てなければなりません。他人を引き立てる場合もあります。一人一人が特長を持つことによって組織に特長ができます。

光は目立ちます。日光はどんな人にも注ぎます。光を隠すのではなく、すべての存在に光を与えるような行いをすべきです。太陽から光を受け輝く月の光は暗闇を照らします。

## マタイによる福音書 5 章 律法について

17 「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。

18 はっきり言うておく。すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない。

19 だから、これらの最も小さな掟を一つでも破り、そうするようにと人に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる。しかし、それを守り、そうするように教える者は、天の国で大いなる者と呼ばれる。

20 言うておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない。」

現代においても法や憲法はしっかり守らなければなりません。その上で、追加の価値を生み出さなければなりません。規則を守った上で改善できることをするべきです。

ビジネス学を廃止するためではなく完成に近づけるために書いています。ビジネス学を違った形で生かすために綴っています。

### マタイによる福音書 5章

21「あなたがたも聞いているとおり、昔の人は『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』と命じられている。

22 しかし、わたしは言う。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。

きまりを守ることが重要です。しかし、きまりを守りさえすれば十分ではないと考えます。心の中も重要です。律法が厳しくされているとも考えられます。

### マタイによる福音書 5章

34 しかし、わたしは言う。一切誓いを立ててはならない。天にかけて誓ってはならない。そこは神の玉座である。

わたしたちの生活の中では、予定を変更しなければならないことがあります。

### マタイによる福音書 5章

37 あなたがたは、『然り、然り』『否、否』と言いなさい。それ以上のことは、悪い者から出るのである。」

わたしたちは、イエスカノーかではっきりと答えなければならないことがあります。

#### マタイによる福音書 5 章 復讐してはならない (ルカ 6 29-30)

38「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。

39 しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。

40 あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。

41 だれかが、一ミリオン行くように強いるなら、一緒に二ミリオン行きなさい。

42 求める者には与えなさい。あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない。」

確かに、おうむ返し戦略は自分の利得も社会的厚生も高めていくと考えます。しかし、まずは悪人が現れないようにしなければなりません。ここで述べられているようなことを行いますと、当然のような権利を放棄することになります。先制攻撃するのではなく、仕えるようにして良心や協力を育まなければなりません。平和は祈り続ける過程の中にあります。

また、良心や協力に付け込んではいけないと考えます。

#### マタイによる福音書 5 章 敵を愛しなさい (ルカ 6 27-28、32-36)

43「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。

44 しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。

45 あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者も正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。

46 自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるか。徴税人でも、同じことをしているではないか。

47 自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。

48 だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

「天の父」に習って、敵であっても愛しなさいと教えています。自分を迫害する者をお許しくださいと祈るように教えています。嫌われたり、迫害されたりする相手からこそあなたからの救いが必要であることもあるかもしれません。

自分たちにはないものを持った人を味方にしますとより強くなり完全な存在に近づけることがあります。

愛とは、日が射すことや雨が降ることなどでもあると考えます。わたしたちもそれらをモデルに人を愛することができることは幸いです。

## マタイによる福音書 6章 施しをするときには

1 「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意しなさい。さもないと、あなたがたの天の父のもとで報いをいただけないことになる。

2 だから、あなたは施しをするときには、偽善者たちが人からほめられようと会堂や街角でするように、自分の前でラッパを吹き鳴らしてはならない。はっきりあなたがたに言うておく。彼らは既に報いを受けている。

- 3 施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない。  
4 あなたの施しを人目につかせないためである。そうすれば、隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる。」

財やサービスが売れない時、止むを得ず値引きして売ることがありますが、できる限り価格に表れない仕事もできれば望ましいと考えます。自由な奉仕もできれば幸いです。陰徳を積むことが重要です。後で良くなります。

価格を維持しつつ追加の効用を与えることができるビジネスは強いビジネスです。

#### マタイによる福音書 6 章 祈るときには（ルカ 11 2-4）

- 5 「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言うておく。彼らは既に報いを受けている。  
6 だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。  
7 また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思い込んでいる。  
8 彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存知なのだ。  
9 だから、こう祈りなさい。  
『天におられるわたしたちの父よ、  
御名が崇められますように。  
10 御国が来ますように。』

御心が行われますように。

天におけるように地の上にも。

11 わたしたちに必要な糧を今日与えてください。

12 わたしたちの負い目を赦してください、

わたしたちも自分に負い目のある人を

赦しましたように。

13 わたしたちを誘惑に遭わせず、

悪い者から救ってください。』

14 もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しになる。

15 しかし、もし人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しにならない。」

ここで述べられています祈りは、願い事を伝える手段ではないようです。また、願うことに関して、人間の認識と神の認識の間にずれがあることがあるかもしれません。人間は、本当は願っていないことまで願ってしまうことがあるかもしれません。自分が求めたものは得られなかったのに、全体としてなら、あるいは最後には願いが叶っていることがあるかもしれません。

言葉数が多いという理由だけで聞き入れてはいけないのかもしれませんが。言葉数を多くすることによって願いが叶うのではないようです。神の働きが世の中で行われることを祈ることが適切です。わたしだけでなく周囲も含めてわたしたちに必要なものを求めるのが適切な祈りです。また、わたしたちは赦されて生きているところがあると考えます。

善いことをしても知らせたり、他人から罪を告白されても強く咎めたりする必要はないことがあるのかもしれません。わたしたちの言動の報いはわたしたちに返って来ると考えます。

### マタイによる福音書 6 章

18 それは、あなたの断食が人に気づかれず、隠れたところにおられるあなたの父に見ていただくためである。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。」

他人に見せようとして努力するのではそのことによって既に自分に報いを与えていることになります。努力をしても報いを受けることを先送りにする、報いは後でよいと考えるぐらいが望ましいのかもしれませんが。

### マタイによる福音書 6 章 天に富を積みなさい (ルカ 12 33-34)

19 「あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。

20 富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。

21 あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ。」

今出ている利潤はいつか減少するかもしれません。

現代は国境を越えて人、物、金が自由に行き来するグローバル経済ですが、その自由を統制する世界国家は存在せず、世界中央銀行も存在しません。自由になり過ぎますと各国の国内で行われる経済対策が有効に機能しにくいなどの不自由が生じることが考えられます。

日本の財政再建のためには、少なくとも日本の民間と政府の貨幣の総和を赤字に向かわせないことが必要です。それでも、海外と平和に交流できますことは非常に幸いです。

地上に富を蓄積しますとそのことに執着してしまいがちになります。すべての国の国民ができることが徳を積むことであり、世界が明るくなり一つになることができます。



### マタイによる福音書 6章 神と富（ルカ 16 13）

24 「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

独立して富を蓄積しているつもりでも、富に支配されているとも考えられます。何かを使っているつもりなのに使われているとも考えられることがあります。

富に仕えることと神に仕えることは正反対です。富を得ることを目指すことから神に仕えることを目指すことに変えるぐらいの転換が必要な場合があると考えます。

お金を得ることだけを追求しないからお金以外の存在が残ります。

### マタイによる福音書 6章 思い悩むな（ルカ 12 22-32）

25 「だから、言っていく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。

26 空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。

27 あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。

28 なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意してみなさい。働きもせず、紡ぎもしない。

29 しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。

30 今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこ

のように装ってください。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。

31 だから、『何を着ようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。

32 それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存知である。

33 何よりも、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。

34 だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」

わたしたちが生きていくためには様々な努力が必要です。しかし、人は能動的に生きていると同時に空の鳥や野の花と同様に生かされています。

無限に利益を追求する先に広がる世界はわたしたちが望んでいた世界ではないかもしれません。お金を稼ぐことを考えてはいけないではありませんが、「まず、神の国と神の義を求め」ることが重要です。多くの利潤が出ている状態が主であると見なさないのが適切であるかもしれません。お金の流れを良くする前に人々の間に働く心の動きを良くしなければなりません。

先のことを思い悩んでも効果はないようです。その時になって初めて正しい判断ができます。

#### マタイによる福音書 7 章 人を裁くな（ルカ 6 37-38、41-42）

1 「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。

2 あなたがたは、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量る秤で量り与えられる。

3 あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。

4 兄弟に向かって、『あなたの目からおが屑を取らせて下さい』と、どうして言えようか。自分の目に丸太があるではないか。

5 偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からおが屑を取り除くことができる。

人間社会の特徴の一つとして、神が食べてはならないと命じられた木の実を食べられるような自由もありますが、そのことによって不自由が生じることも考えられます。人間の特徴の一つは、価値判断を下し自分の判断で善悪を区別し決めようとすることであり、善悪の知識の木から実を取って食べるとはそのことを象徴していると考えます。創世記2章17節には「善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」とあります。人間は価値判断を下し自分の判断で善悪を決めることができますが、いつかは死ななければならない特徴を持ちます。

人は自分が善いと思ったことに労力を使います。人が他人を裁く時、まず自分の量る秤や価値観で他人を評価しがちです。そうしますと、他人からもその秤や価値観で評価されます。まず自分の秤や主観的な価値判断を取り除いてみますと、自分の欠点が見えます。自分が他人の欠点を背負い支えることが重要です。その上でなら、柔和な心で人を正すことができますと考えます。

### マタイによる福音書7章

6 神聖なものを犬に与えてはならず、また、真珠を豚に投げてはならない。それを足で踏みじり、向き直ってあなたがたにかみついてくるだろう。」

成句「豚に真珠」はここから来ています。ある人から見て価値が高いと考えている物でもその価値が分からない人は無価値であると考えることがあります。価値ある教えや物は価値の分かる人に与えるのが適切です。

### マタイによる福音書 7 章

7「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。

8 だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。

探し求めますと、得られる方へ向けた努力や行動をとるようになります。場合によっては長期間かかるかもしれませんが、目標達成へ向かっていくことができます。

### マタイによる福音書 7 章 狭い門（ルカ 13 24）

13「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。

14 しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。」

進路などを決めるとき、狭き門から入るべきことを教えていると考えます。また、たとえ狭き門であっても何度も通らなければならないかもしれません。さらに、門や細い道の形さえしておらず、門や細い道を創造していかなければならないこともあります。しかし、狭き門を通りますと、先に広い世界が広がっていくかもしれません。皆が気付かないような細い道を見出すことが生き残りに繋がることもあるかもしれません。

### マタイによる福音書 7 章

17 すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。

18 良い木が悪い実を結ぶことはなく、また、悪い木が良い実を結ぶこともできない。

良い人は良い心の中から良い言葉を語り、良い結果を出します。良い結果を出すためには良いプロセスが必要です。上げた成果でその人物を見ることができます。

### マタイによる福音書 7 章 あなたたちのことは知らない（ルカ 13 25-27）

21 「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである。

22 かの日には、大勢の者がわたしに、『主よ、主よ、わたしたちは御名によって預言し、御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇跡をいろいろ行ったではありませんか』と言うであろう。

23 そのとき、わたしはきっぱりとこう言おう。『あなたたちのことは全然知らない。不法を働く者ども、わたしから離れ去れ。』」

「御名によって預言し、御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇跡をいろいろ行っ」ても、すなわち、良いことをしても、それをあまり言わない方が良いでしょう。

### マタイによる福音書 7 章

24 「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行かう者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。

土台をしっかりさせた上で物事を行わなければなりません。しっかり

した土台の上に積み上げなければなりません。

### マタイによる福音書 7 章

29 彼らの律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。

イエスの教えは、きまりがこうだから守りなさいという教え方にとどまっています。

### マタイによる福音書 8 章 重い皮膚病を患っている人をいやす（マコ 1 40-45、ルカ 5 12-16）

- 1 イエスが山を下りられると、大勢の群衆が従った。
- 2 すると、一人の重い皮膚病を患っている人がイエスに近寄り、ひれ伏して、「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と言った。
- 3 イエスが手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われると、たちまち、重い皮膚病は清くなった。
- 4 イエスはその人に言われた。「だれにも話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めた供え物を献げて、人々に証明しなさい。」

イエスは病気を患っている人々をいやしたと様々な箇所では記されています。

実際に重い皮膚病がすぐに治るとは考えられません。しかし、重い皮膚病を治療しようとするとともに、復帰させようとすることによって実際に治る以上の効用を与えることが可能になると考えます。心がいやされます。イエスの活躍はまだこれからです。

## マタイによる福音書 8 章

8 すると、百人隊長は答えた。「主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます。

ひと言でその後の展開が大きく変わることがあります。

それほど大きな仕事で人をいやすことができなくても、適切なひと言の積み重ねがいやし良い方へ導くことがあります。このような信仰もあると考えます。

印象に残るひと言が大事な場合もあります。

## マタイによる福音書 8 章 多くの病人をいやす (マコ 1 29-34、ルカ 4 38-41)

14 イエスはペトロの家に行き、そのしゅうとめが熱を出して寝込んでいるのを御覧になった。

15 イエスがその手に触れられると、熱は去り、しゅうとめは起き上がってイエスをもてなした。

16 夕方になると、人々は悪霊に取りつかれた者を大勢連れて来た。イエスは言葉で悪霊を追い出し、病人を皆いやされた。

17 それは、預言者イザヤを通して言われたことが実現するためであった。

「彼はわたしたちの思いを負い、  
わたしたちの病を担った。」

実際に多くの病人の病気がすぐに治るとは考えられません。多くの病人を気遣い、適切で望ましい言葉をかけることが重要です。それができるのは多くの病人の立場に立つことができる人です。

マタイによる福音書 8 章 弟子の覚悟（ルカ 9 57-62）

18 イエスは、自分を取り囲んでいる群衆を見て、弟子たちに向こう岸に行くように命じられた。

19 そのとき、ある律法学者が近づいて、「先生、あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言った。

20 イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕する所もない。」

21 ほかに、弟子の一人がイエスに、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。

22 イエスは言われた。「わたしに従いなさい。死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。」

適切に生きるためには、今こうするしかないということをしなければならぬと考えます。今何をするべきかを意識しなければならないと考えます。

マタイによる福音書 8 章 嵐を静める（マコ 4 35-41、ルカ 8 22-25）

23 イエスが舟に乗り込まれると、弟子たちも従った。

24 そのとき、湖に激しい嵐が起こり、舟は波にのまれそうになった。イエスは眠っておられた。

25 弟子たちは近寄って起こし、「主よ、助けてください。おぼれそうです」と言った。

26 イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。」そして、起き上がって風と湖とお叱りになると、すっかり凪になった。

27 人々は驚いて、「いったい、この方はどういう方なのだろう。風や湖さえも従うではないか」と言った。



このような嵐の状況では怖れます。しかし、この場合は皆が助かりました。恐れる必要はありませんでした。できる限り困難に遭遇しないよう常から用心が必要です。

自然は神が作ったものであると考えるようです。神は自然をも支配する、自然現象や自然の構成要素以上の存在であると考えられます。

風と湖を叱りますと急に嵐が静まるとは考えられませんが、弟子たちは、嵐の状況を中心に、主に据えて見て怖れています。この状況とそれを困難だと思う自分たちが中心ではないと考えます。より強い信仰へ進むよう励ましているようです。

困難と思える状況から自分たちだけが助かろうとしますと恐れが強くなるがあると考えます。自分たちだけが助かろうとしますと助からなくなる場合も考えられます。周囲も救うことを考えますと自分たちも良くなることがあります。いつも大きな利潤が出ている状態も主ではないと考えます。

困難に遭遇しても乗り越える方法はあると考えることによって道を開くための希望を持つことができます。希望を持たせることが重要です。どんな嵐もいつか過ぎ去ると信じ向き合うことが重要であると考えます。

ある出来事を観察したときそれを受け取る人の考え方や言葉によってその後の結果が違ってくことはあると考えます。

イエスを中心に考えますと、わたしたちの恵まれていることが分かります。

#### マタイによる福音書 9 章 指導者の娘とイエスの服に触れる女（マコ 5 21-43、ルカ 8 40-56）

18 イエスがこのようなことを話しておられると、ある指導者がそばに来て、ひれ伏して言った。「わたしの娘がたったいま死にました。でも、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、生き返るでしょ

う。」

19 そこで、イエスは立ち上がり、彼について行かれた。弟子たちも一緒だった。

20 すると、そこへ十二年間も患って出血が続いている女が近寄って来て、後ろからイエスの服の房に触れた。

21 「この方の服に触れさえすれば治してもらえる」と思ったからである。

22 イエスは振り向いて、彼女を見ながら言われた。「娘よ、元気になりなさい。あなたの信仰があなたを救った。」そのとき、彼女は治った。

23 イエスは指導者の家に行き、笛を吹く者たちや騒いでいる群衆を御覧になって、

24 言われた。「あちらへ行きなさい。少女は死んだのではない。眠っているのだ。」人々はイエスをあざ笑った。

25 群衆を外へ出すと、イエスは家の中に入り、少女の手をお取りになった。すると、少女は起き上がった。

26 このうわさはその地方一帯に広まった。

人に触れたために急に病気が治ることや、亡くなった人が生き返ることは考えられません。この奇跡はこの指導者一人ではできないことでした。しかし、「わたしの娘がたったいま死にました。でも、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、生き返るでしょう。」と言える信仰をこの指導者は持っています。指導力だけを身に付ければ十分ではないと考えます。指導力に加え愛や憐れみを受け継ぎ与えていく必要があります。イエスが、指導者の家に行き亡くなった少女の手を取りますと、娘を亡くしたこの指導者はいやされたと考えます。

もう終わりだという絶望的な状況においてもその先に向けて一步を踏み出す必要があると考えます。次に何かが起こる可能性が生まれます。

いやしを与える人と与えられることを信じる人が出会っていやしが起

こっています。

### マタイによる福音書9章 二人の盲人をいやす

27 イエスがそこからお出かけになると、二人の盲人が叫んで、「ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください」と言いながらついて来た。

28 イエスが家に入ると、盲人たちがそばに寄って来たので、「わたしにできると信じるのか」と言われた。二人は、「はい、主よ」と言った。

29 そこで、イエスが二人の目に触り、「あなたがたの信じているとおりにするように」と言われると、

30 二人は目が見えるようになった。イエスは、「このことは、だれにも知らせてはいけない」と彼らに厳しくお命じになった。

31 しかし、二人は外へ出ると、その地方一帯にイエスのことを言い広めた。

実際に盲人の目を触ったらすぐに見えるようになるとは考えられません。しかし、一般に、人付き合いにおいては、相手を良く思いますと相手からも好意を持ってもらえます。故に、自分もいやされます。相手ができると信じますと、その信じてくれた人に対して好意や憐れみを与えられるようになることがあります。

相手を信じ敬うことからいやしは始まります。

### マタイによる福音書9章 口の利けない人をいやす

32 二人が出て行くと、悪霊に取りつかれて口の利けない人が、イエスのところに連れられてきた。

33 悪霊が追い出されると、口の利けない人がものを言い始めたので、群衆は驚嘆し、「こんなことは、今までイスラエルで起こったためしがない」と言った。

34 しかし、ファリサイ派の人々は、「あの男は悪霊の頭の力で悪霊を追い出している」と言った。

実際に口の利けない人をすぐにものが言えるようにすることができるとは考えられません。しかし、嫌な思いなどをして、話したくないと思っている人、コミュニケーションが取りにくいと思っている人をいやすことによって話せるようになることは考えられることです。

さらに嫌なことを言うことによっていやせるわけではないと考えます。

### マタイによる福音書 9 章

36 また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。

37 そこで、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。

38 だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。」

大勢の人が弱り果て、打ちひしがれている時は、仕事が多くある時であると考えます。そのような時、そのような人たちをいやす仕事は多くあるのに行う人が少ないことがあるかもしれません。

需要と供給のバランスがとれているか、望ましいことができているか見直さなければならないことがあります。

### マタイによる福音書 10 章

8 病人をいやし、死者を生き返らせ、重い皮膚病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい。ただで受けたのだから、ただで与えなさい。

労働、土地、貨幣、情報などを市場で取引することを考えるのに加えて、無償でできるいやしや良い知らせが可能な限りできれば市場経済の社会は良くなると考えます。そして、そのようなことが市場経済を支えます。

マタイによる福音書 10 章 迫害を予告する (マコ 13 9-13、ルカ 21 12-17)  
16「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。

反発されそうな状況ではこのようにあるべきであると考えます。

#### マタイによる福音書 10 章

22 また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。

いくら苦しくとも最後まで忍耐することが良い結果に繋がることがあると考えます。

#### マタイによる福音書 10 章

23 一つの町で迫害されたときは、他の町へ逃げて行きなさい。

ある所で批判されても他の所では評価されることがあるかもしれません。

#### マタイによる福音書 10 章

26「人々を恐れてはならない。覆われているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはないからである。

正しく生きますと、恐れが少なくなることはあります。

### マタイによる福音書 10 章

34 「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思ってはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。

35 わたしは敵対させるために来たからである。

人をその父に、

娘を母に、

嫁をしゅうとめに。

36 こうして、自分の家族の者が敵となる。

父母やしゅうとめが若い人を適切に導くのが基本です。父母やしゅうとめは尊敬しなければなりません。しかし、その方々以上の教えを身に付けることができれば家庭はさらに良い方に向くと考えます。社会も好ましい方に変わると考えます。

それぞれが敵対して協議しなければならない時があります。どちらかを選択することが大事であるだけでなく、協議すること自体に価値がある場合があると考えます。

### マタイによる福音書 10 章

38 また、自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない。

39 自分の命を得ようとする者は、それを失い、わたしのために命を失う者は、かえってそれを得るのである。」

自分を守ろうとするから次の展開が来ず、新しくなろうとするから発展することがあります。自分の持っている物を守るより与える方が良い

結果に繋がることもあると考えます。

現在見える利潤を目指して参入するだけでなく、まだ利潤が見えないのに歩み続ける必要がある場合もあります。当てがあるということは既に報われている部分があります。何の当てもなく進まなければならないこともあります。

### マタイによる福音書 11 章

17『笛を吹いたのに、

踊ってくれなかった。

成句「笛吹けども踊らず」はここから来ています。お膳立てをしてもらいすすめ誘ってもらったことに気づき、それに応じて動き出さないといけないことがあります。

### マタイによる福音書 11 章

25 そのとき、イエスは言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のよ  
うな者にお示しになりました。

賢いと思いますとそこで進歩が止まることがあります。人に忠告してもらえなくなることがあります。素直に受け入れるから学び続けることができ新しいことが分かります。

### マタイによる福音書 11 章

28 疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。

29 わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学び

なさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。  
30 わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」

わたしたちは、疲れたり、重荷を負うことがあります。努力することは大切です。しかし、自分たちで頑張りさえすればうまくいくと考え過ぎていることがあるかもしれません。そのようなとき、柔和で謙遜な方から学ぶことは貴重です。

より軽いものを負う、あるいは少し行う方が、安らぎ、成果に繋がることもあります。

#### マタイによる福音書 12 章

19 彼は争わず、叫ばず、  
その声を聞く者は大通りにはいない。

20 正義を勝利に導くまで、  
彼は傷ついた葦を折らず、  
くすぶる灯心を消さない。

イザヤ書 42 節に同様の記述があります。目立つ所にはイエスのような人の声を聞く人はいないようです。

くすぶった心を消すことなく正義を勝利に導くと考えます。



＜参考文献＞

- Alyce M. McKenzie, *Matthew*, Interpretation Bible Studies(Louisville, Westminster John Knox Press, 2002) 宮本あかり訳『マタイによる福音書』日本キリスト教団出版局 2010 年
- 新村出編『広辞苑第六版』岩波書店 2008 年
- 中谷巖『資本主義はなぜ自壊したのか』集英社 2008 年
- 日本聖書協会『聖書 BIBLE 和英対照 和文／新共同訳 英文／Today's English Version』2008 年
- 日本聖書協会『聖書 新共同訳』2009 年

